

インドネシアの現地理解教育をテーマにした校内研修の実践 —現地理解から日本型教育の発信へ—

前在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校教諭
新潟県柏崎市立田尻小学校教諭 中村 昭宏

キーワード：現地理解教育、校内研修、日本型教育の発信、現地校視察、職員合同研修

1. はじめに

私にとって、初めての在外施設派遣であった。初めは見るもの全てが新鮮で、海外の空気を吸うだけで、自らの国際性も高まったのではないかと錯覚をしてしまうほどであった。しかし、普段の生活を振り返ってみると、日本人のコミュニティ内だけで生活が完結してしまう自分がいると感じた。児童生徒の国際性を豊かにするために、教師自らの現地理解の必要性を痛感した。現地理解教育の推進をテーマに校内研修の主任を任せていただき、中心となって進めることができた。本実践は、現地について体験的に理解する機会を校内研修に位置づけ、教職員全員で力を合わせ行ってきた実践記録である。

2. 主な校内研修の取り組み

校内研修のテーマを「体験的な活動を通して、教員が現地についての見識を深め、現地の方々や現地校及び現地施設との交流を推進する」と設定した。その研修の中で、現地の方々と連絡を取り合う事、活動を行うことは一筋縄ではいかなかった。当校の現地スタッフの力を借りても、連絡をしても返事がない、突然予定が変更になる、連絡の内容と実際の内容が異なるなど、様々な事があった。そのため、常にA案、B案（何かあった時の計画）、C案（またまた何かあった時の計画）と考えを巡らせて複数案を計画し、現地の方と調整し、気長な態度で行っていくことが重要である。以下、3つの実践を紹介する。

（1）バンドン市内にある施設への見学

海外で校外学習を行う際の安全確保、日本と違った環境下での教材開発は困難である。また、職員が数年単位で入れ替わるために、見学施設及び教材の引継ぎは重要である。特に当校のような小さな学校はなおさらである。校内研修では、校外学習で出掛けたい公共施設の下見と合わせ、職員全員で見学を行った。消防署や水道局、バンドンの自然が味わえるテーマパークなど子ども達の活動をイメージしながら、現地理解の研修を行うことができた。普段の勤務時間内では難しいこのような活動が、職員全員で行うことができたことは良かった。他にも現地の方々が利用するアンコタ（写真）に現地スタッフと一緒に乗ったり、現地の食材を使った伝統料理を作ったりしながらインドネシアについて職員同士で情報交換しながら研修を進めていった。

（2）バンドン市内にある現地校への視察

校内研修及び個人研修で視察させていただいた学校は、国立小中学校、私立学校、インターナショナル校、キリスト教系の現地校、特別支援学校と多岐にわたった。

バンドン市内には、400校の小学校があり、その内、国立は274校である。1クラスの定員は30人と国で定められている。日本人学校近くの国立小学校は、児童数に対して、教室が足りず、活動する場所も少ないという事で、2部制を採用している。1部（7:00～12:00）で該当学年は1・2・3・6年生である。2部（12:30～17:00）で該当学年は、4・5年生である。学校以外



現地の乗り物（アンコタ）

の時間は家の手伝いをしたり、塾に行ったりしている。先生方は、日本と同じ担任制であるが、体育と宗教の授業のみ専科の教員が教える。現教員数は、40人程度で、年齢層は23～59歳で若い先生も多い。ほとんどが地元バンドンの大学のUPI（インドネシア教育大学）の卒業生である。先生という職業は、公務員であり、人気がある。

（3）現地校の先生方との職員合同研修

現地校視察を通して、現地の先生方が日本の教育に対して、興味関心をもっていることがわかった。そこで、校内研修の中で、近隣の学校の先生方に声を掛け、日本の教育を体験していただく機会を設け、日本型教育の発信の場を設けた。ここでの問題はインドネシアの学校とは勤務時間が異なるため、時間帯を合わせる事が難しいことであった。当日まで何名の方々がいらっしゃるのか分からなかった。連絡調整は、個人のSNS(What's up)で行った。6時間目をフリー参観とし、4名の方々は初めて来校していただいた。授業を参観されて一番驚かれていたのは、「日本の教科書」である。写真やイラストがたくさんあり、見やすく、紙の質も高いという意見をもらった。教科書が1人ひとりに配られ、個人で所有することにも違いを感じられていた。インドネシアは国から支給されるが、学校で保管し、使い回しをする。施設見学では、子ども達がグラウンドで走り回って遊ぶ様子を見られ、グラウンドの広さに興味をもたれていた。現地校では、限られたスペースで教育活動を行わなければならないと話していた。その後、手作りの日本のお菓子で食べながら、意見交流を行った。質問の内容としては、「日本のカリキュラムについて教えてほしい。何教科あるのか」「毎回指導案を作成しているのか」などがあつた。最後に、理科の授業を体験していただいた。ガスバーナーなどの実験器具は、現地の先生方の学生時代に経験しただけで、現在は全く触っていないとのことだった。インドネシアの小学校ではこのような実験は行われていないとのことであった。



現地の先生方と合同研修会

近隣の国立中学校ともSNSを通じて連絡を取り合った。インドネシア語、数学、理科、英語、宗教など様々な教科の8名の先生方が来校した。やはり8名全員が初めての日本人学校の訪問であった。

授業参観では、日本の教科書の質の高さへの質問が多くあつた。また、中学校では、英語に力を入れているとのことで、小学部3・4年生の外国語の授業を参観され、「日本ではいつから英語を学習しているのか」「どのような教材を使っているのか」などの意見交流を行った。また、理科の授業を参観され、子ども達のレポートの取り方を真剣にメモされる先生もいらつした。

授業体験では、中学校音楽で扱う「箏」の演奏を体験していただいた。インドネシアにも似ている楽器があり、すぐに演奏できた先生もいた。両校が1つの楽器を手に取り合つて演奏することで、少し緊張していた雰囲気も和んだように感じた。その後、教室に入り、英語の模擬授業を行った。日本の教育では教科書の内容を教えるだけでなく、コミュニケーション能力を高めるために、子ども達同士の関わりを意図的に仕組んで活動を計画していることを伝えた。



現地の先生方と合同研修会

3. おわりに

現地校を視察した際、900人の生徒が不思議そうに私を見ていた。顔立ちも服装も言葉も違う外国人を隣の友達とお喋りしながら見ていた。中には怪訝そうな表情で見ていた生徒もいた。静寂に包まれた900人の前でのス

ピーチ。その後、私の日本語とインドネシア語混じりの第1声にわれんばかりの大歓声に会場は包まれた。子ども達はキラキラした目で私の話を聞いてくれた。その瞬間のあの感覚を私は絶対忘れないだろう。派遣された3年間を通して、安全面に配慮しながら積極的に現地に足を運び、現地理解教育に努めてきた。するとインターネットの情報だけでは知ることができなかった部分がたくさん見えてきた。貧富の差が激しいインドネシアにおいて、教育環境の整備は急務だと心から感じた。インドネシアが今後発展をしていく中で、それを支える教育に力を入れなければならないという声を現地の先生方との交流からヒシヒシと感じた。この現地理解教育をテーマに行った校内研修を通して私は「固定観念にとらわれず、変化に柔軟に対応すること」、「異文化に対するときは、相手を尊重し、互いに助け合うこと」を学んだ。最後に、この調査を通して、熱意のある現地の先生方と多く触れ合い、「子ども達を成長させたい」という思いほどの国の先生も同じであり、私自身の意欲にもつながった。そして、何よりインドネシアの学校に通う子ども達の表情がとても明るい。この笑顔をもっと輝かせるためにも、日本でもこの笑顔に負けないくらいの笑顔を咲かせるためにも、ここで経験したことをぜひ今後生かしていきたい。